

第307回くらしの植物苑観察会 令和6年10月25日（金）

「平成・令和野草雑記序説―身近な外来種―」

川村 清志（当館研究部民俗研究系 准教授）

私たちは普段、一体どのくらいの植物に出会っているのだろうか。この観察会では日々接し、ほとんど気づかずに通り過ぎてしまう、身近な草花に目を向けてみたい。とりわけここでは外来種という、本来、日本に生息していなかった植物たちを中心に紹介していく。

外来種は、主に近代以後、意図的、または非意図的な人間の活動によって、本来の生息地とはかけ離れた場所からもたらされた動植物のことである。外来種の中には、様々な問題を引き起こし、ニュースで取り沙汰される生物種もいる。植物の場合、農作物に悪影響を及ぼす種や、茎や花、時には花粉が人に害をなす種がある。また、在来植物の生息環境を奪い、絶滅に迫りやる危険性が高い種もある。植物のなかにはアレロパシーといって、他の植物の成長を阻害する化学物質を分泌して環境にダメージを与えるものもある。

これらの生物は、外来生物法という法律によって特定外来種に定められ、生きたまま持ち運んだり、売買したりすることが禁じられている。植物については、現在のところ、一種が特定外来種に定められ、該当する種の栽培や販売、生花の運搬などが禁じられている。

植物の外来種の場合、観賞用に持ち込まれたものがエスケープし、日本各地に広まってしまったものが少なくない。おそらくその代表が、図1にある^{オオキンケイギク}大金鶏菊である。この花を1度はお覧になった方も多いはずである。毎年、初夏の頃、幹線道路沿い、公園の花壇や街路樹のまわり、河原沿いなど、至る所でこの花を見かけることになる。オレンジコスモスのようにも見えるが、葉の形が全く異なる。私が気づいたのは比較的最近だが、この花が日本に輸入されたのは、明治の早い時期のことであるらしい。大金鶏菊は、その美しさの反面、旺盛な繁殖力によって爆発的に増えてしまった。先に述べた様々な場所で、この妖艶な花は、初夏から盛夏にかけて株をなし、群れをなして咲き乱れる。そのために他の在来種を駆逐し、生態系を一変させるとして特定外来種に指定されている。



図1 オオキンケイギク

その美しさから花を持ち帰る人もいるが、それは立派な法令違反である。

最もここで取り上げたいのは、問題となっている外来種だけではない。もう少し慎重に、そして丁寧に自分の日々の生活を振り返ってみよう。

まだ早春の頃、地上近くに白や薄青の六角形の花を見かけることがある。見事な造形美にその花を手折ったりしてはいけない。特に毒があるわけではないが、この花を香ることはお勧めしない。英語で「^{Star of David}ダビデの星」とも呼ばれるその花は、明治期に渡来したハナニラである。



図2 タンポポによく似た花



図3 アカバナユウゲショウ

四月になると、博物館への道すがらに無数の黄色の花が、道沿いや土手に咲き誇っている。一見すると、タンポポのようにも見えるその花は、タンポポよりも背が高く、何よりも枝分かれして、複数の花を咲かせている（図2）。ほぼ同じ頃、野が一面白く霞んだようにみえることがある。ハルジオオン、あるいはヒメジオオンという、こちらもキク科の外来種が野を覆い尽くしているのである。

これらの花ほど目立たないが、道の端々に、可憐と形容したくなる桃色の花が目につくのもゴールデンウィーク前後のことである（図3）。この花の名前は、^{アカバナユウゲショウ}赤花夕化粧、アカバナ科の植物で明治期に輸入されたものが野生化したものである。この他にも線路沿いに薄緑の葉を重ねる巨大な植物、同じく線路沿いに現れる子供の背丈を優に超える棘だらけの茂みなど、私たちの季節を彩るのは、実はほとんど外来種なのかもしれない。

これらの外来種を顧みることで、かつて柳田國男が論じたように、私たちの「世相の移り変わり」を垣間見る端緒としてみたい。

.....

次回予告 第308回くらしの植物苑観察会 令和6年11月23日（土・祝）

「菊細工番付の変遷」

平野 恵 氏（台東区立中央図書館 専門員）

13:30～15:30

くらしの植物苑 東屋 申込不要